

国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈基調講演〉日本語教育における漢字学習の支援方法

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加納, 千恵子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000937

日本語教育における漢字学習の支援方法

加納 千恵子

本日はいろいろな国や地域の方々から、世界の漢字教育のお話を伺えることを私自身も楽しみにしてまいりました。その前座として、これまで長年漢字を教えてきた経験から、日本語教育において漢字を学習する人たちをどのような視点で支援していったらよいかについてお話しします。漢字は難しいとよくいわれますが、じつは非常に面白い、漢字があるから日本語を勉強するのが好きという人たちもいますので、プラスの面とマイナスの面、面白さと難しさの両面から考えてみたいと思います。よろしくお願ひします。今日は時間も限られています。今日は時間も限られています。今日は時間も限られています。

面から考えてみたいと思います。よろしくお願ひします。今日は時間も限られています。今日は時間も限られています。今日は時間も限られています。

たとえば、エレベーターにのっていて
こちらに向かって走って来る人がいたら……



図1

同じ状況で
表示が漢字だったら……



図2

この会場には、日本人ばかりでなくいろいろな国の方がおられますが、日本でエレベーターに乗っていて、こちらに向かって走ってくる人がいたら、**図1**のどっちのボタンを押したらいでしょうか。けっこう迷いますね。開けてあげようと思つて間違つたほうを押して、閉めたりすることもあります。これが漢字表示だったらどうでしょうか（**図2**）。漢

とのディスカッション等につなげていただければと思っております。

はじめに—学習者にとって漢字とは

加納 千恵子(かのう ちえこ)

筑波大学教授。留学生センターおよび大学院人文社会科学
研究科国際日本研究専攻担当。著書は、『基本漢字500 Basic
Kanji Book』vol.1&2(共著、凡人社、1989年)、『漢字100PLUS
Intermediate KanjiBook』vol.1&2(共著、凡人社、1993年/2003
年)、『日本語教育叢書つくる 漢字教材を作る』(共著、スリーエー
ネットワーク、2011年)など。



字だった時代もありました。日本人にとっては、漢字のほうが間違えないというか、確実に開けてあげられると思います。このように、字を見ることで意味がわかるということが、そもそも非漢字圏からきている学習者には、最初非常にわかりにくいことではないかと思えます。私も長く日本語を教えていて、学習者が疑問に思うこととして、「形を見て意味がわかるって、どういうこと?」ということがあります。もちろん、象形文字と呼ばれている「山」とか「川」は、形を見れば意味はなんとなくわかります。でも、経済の「経」や「済」を見て意味がわかるでしょうか。形と意味に結びつきがあるのか、という疑問はけっこうあるようです。

また、たとえば、「木、気、季、基、記、紀、期、貴、帰、器、機……、これらぜんぶ「き」と読むのか」という疑問もあります。

さきほど影山所長のお話にもありましたが、音声でコミュニケーションをとって、あとから文字ができました。そのため、音声を映すものが文字だと、表音文字を使っている世界のほとんどの国では思われていますので、「き」という音を表すのにこんなにたくさん文字があるのはどういうことなのかも疑問となるわけです。

そして、平仮名もあるし片仮名もあるのに、なんでまた漢字まで学習しなければならないのか。

世界の言語のなかで、だいたい一つの言語は一種類の文字体系を使っていることが多く、平仮名と片仮名と漢字という三種類を使うことが非常にわかりにくいことなので、これも説明しなければいけないことです。

そして、ご存じのように、初級のころに習うやさしい漢字ほど読み

方がたくさんあるわけです。音読みと訓読みがあることはだいたい知られていますが、「生」は音読みでも「せい」「しょう」と読んだりします。訓読みも、「生きる」「生まれる」「生える」「生ビール」とか「生そば」の「き」とか、どうしてそんなにいっぱいあるのか(図3)。

「鬱」は常用漢字になりましたが、こんな形をどうやって覚えるのかという、非常に素朴な疑問もあります。これは日本人でもちゃんと書ける人はそういないわけですから。

そもそも、常用漢字は二、三六字あると聞いて、文字なのになぜこんなに数があるのかという疑問があります。これはあとでもできますが、漢字は表語文字といわれるように、ことばを表しているもので、文字というより「語」です。そうすると、語彙の数が二千ほどあるということは、どの言語でもそんなに驚くべきことではありません。初級で千五百語とか二千語くらい勉強することはヨーロッパ言語でも普通です。文字だと思っから多いのであって、ことばだと思えばそんなに多くはありません。平仮名と片仮名を習ったあとに出てくるので、同じくらいかなあと思って、五十字を超えてもまだ続く漢字学習で一〇〇字くらいになつてくると、そろそろ雲行きが怪しくなっ



図3 学習者にとって、漢字とは？

て、いつ終わるのだろうか、ほんとうに終わるのだろうか、ネバーエ
ンディングのように思うわけです。

漢字の四つの情報

学習者からのいろいろな疑問、不安を聞いていると、日本人が漢字
を勉強するのはかなり違うことがわかります。日本人は、漢字を習
う段階では、読みと意味、それがどういうときに使うことばなのか、
母語ですからもうすでにわかっている状況です。小学校一年生から漢
字の学習が始まりますから、漢字の学習は、**図4**に示す、読みと意
味のわかっていることばに形をのせる文

字学習になるわけです。それでも小学校
の六年間をかけて教育漢字千六字を覚え
るのです。母語の人がそんなに時間をか
けて勉強することを、外国人が一年や二
年で勉強できるのか。

そして、外国人にとっては、漢字の読
みと意味の連合と、それが文章中でどの
ように使われるのか、どんな文脈で、ど
んな場面で使われるのかも、新しいこと
であることが多くなっています。それが
済んでいないと、すんなりと字形との連
合は進みません。字形そのものも難しい
といわれますが、漢字の読み、意味、字

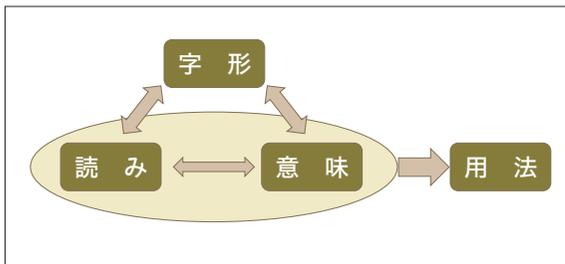


図4 漢字の4つの情報

- ・表音文字、表語文字
- ・ひらがな、カタカナ、漢字の役割
→ 日本語の表記システム
- ・象形文字、指事文字、会意文字、形声文字
- ・音読み、訓読み、複数の読み
- ・部首、音符、構成要素
- ・対議字、類義字、意味ネットワーク

図5 漢字とは？

形、用法という四つの情報のなかで、知らないことばかりを組み合わ
せて覚えなければいけない難しさがあるわけです。日本人の子どもた
ちも漢字習得に非常に時間がかかることから、国語で行われている漢
字教育をはじめのころは真似して外国人に教えていることが多かった
のですが、それではやはりうまくいきません。

さきほど司会の高田先生から、漢字圏の中国の人でも、日本とこと
ばが違うので日本の漢字は難しいという話がありました。じつは中国
の人だったら漢字の形を見れば意味は母語で知っているわけですから
すぐわかるわけです。訓読みはまったくわからないと思いますが、音
読みであれば、ある一定の法則で近い発音など多少類推ができます。

でも、それを日本語という言語の
なかで、どんな品詞で、どんな場面
で、どんなことばと一緒に使うのか
という用法に関しては、まったくわ
からないわけです。特に動詞や形容
詞の送り仮名などは、中国にはない
ので、そういった用法に気をつけな
ければならないわけで、漢字に関し
ては、意味がわかることと使えるこ
とはまったく違います。

まとめますと**(図5)**、表音文字
になれている人たちに、表語文字を
どうやって理解してもらったらい
か。平仮名、片仮名、漢字はどれも

必要なもので、日本語の表記システムのなかで、どんな役割を担っているかということもオリエンテーションしていかねばなりません。漢字と一言にいつても、象形文字である漢字と、指事漢字、会意文字、形声文字では性質が違います。漢字を見れば意味がわかります、形を見れば意味がわかりますといえるのは最初だけです。それは常用漢字全体のなかで一割ほどしかありません。漢字は形を見れば意味がわかるといわれて、山とか川を見て面白いなあと思って学習をはじめた人たちは、途中でだまされたような気になるといえるか、形を見てもぜんぜん意味がわからない漢字がいっぱい出てくるわけです。特に形声文字が占めている割合が高いですから、そういうものは教え方のストラテジー、方略も変える必要があります。ただ漢字という一つのことばで済ませてしまうと、学習者は思いこみで、途中から学習ストラテジーを変えることができない場合もあります。

音読みと訓読みがあるのは、日本が中国の文字を借用したという歴史的な経緯からしかたがないことですが、よく使われる漢字ほど訓読みも増えていきます。音読みも中国からはいつてくる時代時代の方言の発音に近くなっているのです、呉音とか唐音とか違う読み方をもっている漢字があります。また、さきほどの「鬱」という字ほどではなくても複雑な字体になると、その部首は何なのか、その漢字の音読みを類推するためのヒントとなる音符は何なのか、複雑な形だけれど構成要素に分けていくと共通の部分がかなりあるというようなことをわかってもらわないといけないわけです。

最後は、漢字は文字というよりことばであるということからすると、どの国の言語でも、対義概念、類義概念のことばがあり、また、上位

語があつて、その下にたくさん下位の意味のことばがつかるといった意味ネットワークをもっています。それをうまく使つて漢字を勉強する、または漢字をことばの勉強に活かしていけないかといったことを考へて、日本語教育のなかでやつていかなければいけないと思います。

情報のもつ面白さと難しさ

このような漢字がもつ情報一つひとつに面白さと難しさがあると考えると、どこが面白く、どこが難しいのでしょうか。なぜ、形が難しいのかというと、皆さんよくご存じのように、点画が多く、書き順も「右」と「左」で違つとか、「必」のように、なぜその順番で書かなければならないのかよくわからない筆順の漢字もあります(図6)。また、非常に似ている字形があります。たとえば、「土」と「土」、「待」と「持」、見慣れないとみんな同じに見えます。

以上のようなところが難しいといわれていますが、逆にアルファベットやほかの国のシンプルな文字の形にはない、非常に変わった形をしているので、そこから意味のイメージが膨らみやすいとか、共通の構成要素を探したり、その構成要素もどこに現れるかわからない神出鬼没なほどバラバラなわけではなく、ある一定の構造化があるようなことに気がつくと、いわば文法に近いような面白さを成人の学習者

- ★点画が多く、形が複雑
- ★書き順が複雑・不統一
- ★類似形が多くまぎらわしい
- ★形がユニークでイメージが膨らむ
- ★共通の構成要素を持つ
- ★構成要素の配置には構造化がある

図6 形が難しい！ 形が面白い！

だと見つけることができるのではないかと思います。

読みは難しいですね(図7)。読みに面白いことがあるかといわれると、あまりあるとは言えません。ここがいま漢字教育で一番遅れているところでは。漢字を覚えるときの方略、ストラテジー研究でも、形の再生や意味との連合のところは非常に進んでいます。どのよう読みなのかを覚えるところの研究はあまり進んでいません。歴史的にこうだからということしかありません。しいていえば、形声文字の音符をもう少しわかりやすく教えるとか、連濁とか促音化に関しては、一種の文法のような音変化のルールを教えながら漢字を教えるようなことが、多少は面白いかなと思います。でも、あまり面白くはないですよ。

- ★1字に複数の読みが対応(音読みと訓読み)
- ★類似音が多い → 形声文字の音符
- ★熟語の読み方が複雑(重箱読み/湯桶読み)
- ★連濁や促音化など → 音変化のルール
- ★特殊な読み方

図7 読みが難しい! 読みが面白い?

- ★象形文字、指事文字、会意文字は数が限られている
- ★中心義と派生義がある
- ★階層構造を持つ意味的概念ネットワーク
 - ☆対義・反義概念
 - ☆類義概念
 - ☆上位概念・下位概念

図8 意味が難しい? 意味が面白い!

- ★造語性(造語のルールと語構成)
- ★送り仮名のつけ方
- ★品詞性
- ★文中での共起性(コロケーション)
- ★文体・ジャンルなど使用上の制約
- ★日本語の表記システムにおける役割

図9 漢字の用法は、語彙・文法といっしょに!

意味は、あまり難しくはありません(図8)。どこの国でもことばには意味があります。でも、形を見ると意味がわかるような漢字は数が限られているので、そのことを知らない、全部同じ漢字一色と思うと、確かに迷路にはいり込んでしまう可能性があります。これは難しいというより、教える側がリードしていかないとはいけません。面白さからいえば、どこの国のことばでもあるような、こういったものを頭のなかでいろいろ覚えていって、文を作ったり、読んだり、書いたりすることで意味がわかれば面白さもどんどん広がっていくことは、漢字に限られたことではありません。どの外国語を習うときも同じだと思います。

用法は、漢字の問題というより、語彙の問題なので、文法、文脈と一緒に覚えていくしかありません。単語だけで覚えていたのでは覚えられないものです(図9)。いままでの漢字教育は、日本語の文法と切り離したところで漢字だけを教えようとしたり、ことばだけを覚えさせようとしたりするので、いくら覚えてもすぐ忘れてしまったり、使えるようにならないといった問題もあるのではないかと思います。語彙として漢字の使い方を覚えることで日本語の文法も覚えられます。送り仮名のつけ方を覚えることで、どんな種類の動詞なのか見分けられるようになるとか、相互に勉強になることがあると思います。

語彙の数だと思えば、数の多さはしかたがないのです。しかし、二十六字とか五十字といった数の文

字しか知らない人たちに、いきなり「漢字ってどんどん出てくるけど、いったい何字覚えればいいのか」と聞かれて、「とりあえず二千字かな」とか答えると、シヨックなわけです。

私のかつての上司でもあり同僚でもあったドイツ人のカイザー先生が、まず、「漢字辞典で一番大きい『大漢和辞典』には五万字ある」といえという提言をしていました。あまりにも天文学的な数字なので、シヨックを通り越してみんな嘩然とします。そんなのが文字であるはずがない。やはり文字ではなくて語なのだという、一つのシヨック療法だと思います。そうして、「常用漢字は二千字ほどです」と。最初に二千字というシヨックが大きいのですが、五万字のあとに二千字といわれると、「まあ、そうか」、少し妥協しようかなというようになるかもしれない。

さらに、国立国語研究所の一九七六年にでた調査報告(注1)で、新聞三紙によく使われている使用頻度の高い千字ほどの漢字を知っていれば、新聞の約九〇パーセントをカバーするという結果がでています。また、使用頻度の高い五百字を知っていれば八〇パーセント近くがカバーされるといふ結果でした。これは、筑波大学でいま使っている教科書で、基本漢字として五百字を選定するヒントになりました。五万字から出発して、長期目標は二千字ですが、短期目標として、初級であればとりあえず五百字というように、だんだんパーセンテージを上げていくと、学習者もちょっとやる気になってくれるかもしれません。これは一種の誤魔化しですが、しかたのないことなので、心理的に誤魔化しても、やってもらいたいと思いました。

漢字学習の支援

結局、漢字は、本人が覚えなければ、先生が無理矢理、頭に入れることはできません。自律学習です。それがうまくいくように、どうやってサポートするかについて、いくつかのヒントがあります。たとえば、記憶を忘れにくくしたり、記憶を促進したりするためのストーリーを作る試みがいくつかあります。

図10は、漢字教材を作る本(注2)に紹介した、漢字教材・学習法の九つのアプローチです。外国人学習者、非漢字圏学習者、漢字圏学習者といっても、個人個人によって認知スタイル、好みが違います。初等教育や中等教育でどんな覚え方をしてきたか、好きな方法や、合っていると思う方法、やりたくない方法とかがありますので、これが一番いいのを一つに絞ることは難しいです。たとえば、ストーリーを作るにしても、武部良明先生(注3)がなさったように、漢字の字源ではなく、「学」という字であれば、片仮名の「ツ」と「ワ」と「子」に分解して、図11のようなストーリーを作ってもいいのではないのでしょうか。旧字体の「學」を知らない学習者にはこのほうがわかりやすいというようなことを提唱されました。

- | | |
|--------|------------------|
| <字形> | (1) 字源中心のアプローチ |
| | (2) 字形構造中心 |
| <読み> | (3) 音符中心 |
| <記憶術> | (4) イメージ中心 |
| | (5) ストーリー中心 |
| | (6) 唱えことば中心 |
| <意味用法> | (7) 意味・用法中心 |
| | (8) 使用場面中心 |
| <その他> | (9) 生素材による自律的学習法 |

図10 漢字教材・学習法のアプローチ (加納ほか, 2011)

学 ツ+ワ+子

「ツ」は「かざり」、「ワ」は「ほうし」で、「子」は「こども」です。「こども」が「ほうし」をかぶって「がっこう」へいきます。「学」のいみは、べんきょうすることです。(武部良明 1993『漢字はむずかしくない』)

図11 字形構造中心のストーリー：漢字の構成要素

音符 交 コウ

交コウ まじわる
効コウ ききめ、てがら
郊コウ 都の外郭
校コウ・キョウ 学校、しらべる

絞コウ しほる、しめる
咬コウ かむ
狡コウ ずるい
較カク・コウ くらべる

(山本康喬 2012『漢字音符字典』東京堂出版)

図12 音符中心の整理：形声文字の音符を利用する

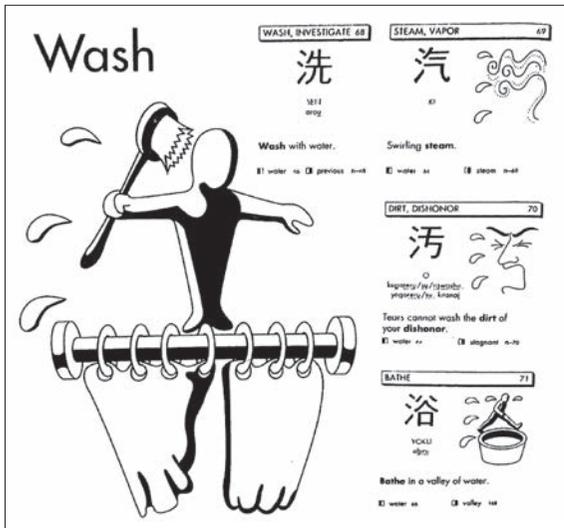


図13 漢字の字形のイメージをイラスト化 (Rowley, 1992)

図12は、日本人向けの『漢字音符字典』(注4)です。古くはイギリスでタイトルが『The Study of Kanji』(注5)という本で、はじめて形声文字の音符という観点から漢字を整理しました。イギリスではいまだにけっこう支持されている本です。

ハワイで出版されたRowleyの本(注6)では字源は無視して、漢字の字形のイメージをイラスト化しています。「洗」という字(図13)は、水滴の部分が「シ」であるのは字源に即していますが、シャワーブラシをもっている人がカーテンの後ろで浴びているような絵です。じゃあ先生の「先」はどう説明するのかというような問題もでてくると思いますが、イメージがとてわかりやすく、見るだけで楽しい。こう

やって覚えるのが好きという学習者もいます。それから、あとで登場されるガリーナ先生の『漢字物語』(注7)もそうですし、ボイクマン先生たちの『ストーリーで覚える漢字300』(注8)、古くはHeisig先生ご自身が覚えたときの漢字の意味と形をむすびつけるストーリーを作る方法を学習者と共有しようとして出版された『Remembering the Kanji』(注9)という本もあります(図14)。Heisig先生の本は覚えさせるといふより自分たちでストーリーを作って覚えようということだと思えますが、このような試みも非漢字圏学習者を対象に作られてきました。

また、日本人は五七五のリズムが好きなので、唱えことばで覚える

ことが、小学生向けの教材(注10)には数多くあります(図15)。外国人学習者にとっては、日本人の小学生向けのものは語彙がちょっと難しすぎるので、そこを工夫すれば、五七五のリズムは一種の日本の文化でもありますので、それに慣れ親しむこともできると思います。図15のように、下に行く道は左にエアポートのエがあるほうが「左」、上に行く道の右にロータリーの口があるほうが「右」と覚える方法もあります。ただ、上に行くか下に行くか間違えると反対になってしまうので問題なのですが、このようにやさしい語彙、外国人学習者が初めのころに習って知っているようなことばを使って、唱えことばによる記憶術を作っていくようなことも、万人に受けるとは思いませんが、好きな学生たちはいると思います。

なんとといっても漢字は文化です。古い伝統的な文化という意味だけではありません。今の若者たちが好きなポップカルチャーのなかにも、Tシャツに印刷される漢字などは非常に興味をひきやすいので、プラスのイメージを活かしていくことで、難しいという印象から、面白いという印象に変えていったらどうかと思います。漢字といえば、複雑で難しく古いのが古いイメージでした。いまは面白くて、不思議で、価値がありそうだともいえると思います。アメリカやメキシコで勉強している学生たちが、どうしてアラビア語とかインドネシア語を選ばないで日本語を選んだのかというところ、あのわけのわからない字を自分は知っていると優越感というか、他

東 木 + 日 = 東 木 9 日 41

ひがし・とう 東 ひがし 東口 ひがしぐち
 東京 とうきょう 関東 かんとう

You can see the sun behind a tree in the **east**.
 Matahari di sebelah **timur** nampak dibalik pohon.

インドネシア語・タイ語・ベトナム語
 (ボイクマン総子ほか 2008『ストーリーで覚える漢字300』
 くろしお出版)

図14 学習者の母語でストーリーを作る
 (Heisig, 1977、ガリーナほか, 2005、ボイクマンほか, 2008)

1. タローくん 名前をかいた カタカナで	2. 公園で たべた おいしい ハムサンド	3. うえへいく みちの右手に ロータリー	4. したへいく みちの左に エアポート
5. 名前 	6. 公園 	7. 右 	8. 左 

図15 唱えことばによる記憶術(浜西, 1983)

の人が知らないことを自分は知っているということらしいです。なんか価値がありそうな不可思議なものというのは、プラスのイメージにもなりうるものだと思います。それから、漢字は、わかるだけではだめで、使えないとだめ、書けないとだめだといわれます。しかし、日本人だって読めるけど書けない漢字がいっぱいあります。特に、いまはワープロで書く時代になりましたから、手で書けといわれると、急に自信がなくなります。ここ線が二本だったか一本だったかとか、点があつたかなくなつたか迷うところがあるわけです。時代とともに、読めること〓書けることではなく

喜びます。「もつと難しいのをだせ」とか、自分たちで問題を作るとかいいだします。難しいといっているかたがないので、楽しいこともちよつとは考えたらどうかと思います。そのためには、漢字を他の技能の練習や勉強と切り離して、「これはあなたのほうで宿題としてやりなさい」というのではなく、もつと他の活動とコラボレーションしたらいんじゃないかと思えます。

読み物を少し面白いものにするのは、よく考えられることです。習った漢字を使ってポスターを作らせたり、自分たちで物語を書かせたり、紙芝居なんかさせると、けっこう面白いものを作ります(図20)。漢字は、読み書きに使うと限定されがちですが、聞きながら漢字を探すのも大事です。これは、話を聞きながらノートをとったり、話を聞きながらに作業をしたりという、母語話者が普通にやっていることを、外国人学習者にも、学習のなかでやらせたらどうかというところからはじまっています。もちろん、漢字を使って学習者にポスターセッションで話させるようなことも、自分はどうしてこの漢字が好きかみたいな話を五分で発表させるみたいなことをさせると、漢字を覚えるだけではなくて、日本語の話す力もつくということがあります。

最終的には、二千もある字を一つひとつ記憶するところまでは教室では保証できませんので、自律学習に任せるしかないところがあります。それにしても、どんな漢字を覚えるのかは学習者自身に決めさせます。いまは携帯で町のサインとか看板なんか写真が撮れますので、そのようなものを撮ってきてクラスでお互いにシェアする。あるいは、初級も後半くらいになって日本語が少し話せるようになったら、先生

がいつも漢字の導入をするのではなく、交代で導入させると、非常に面白い工夫をしてくれる学習者もいて、その漢字はみんなよく覚えていたりします。先生がうまく教えられないことでも、学習者どうしならうまく教えられる場合もあるようです。これはメキシコなどでは実践されているそうです。

テストも、期末テストのような成績にかかわることは先生がやらないと責任上いけないかもしれませんが、日々のクイズとか小テストはお互いに作らせて採点も自分たちでやらせると、むしろ学習者の方が学習者には厳しいんです。先生のほうが甘い。ここが撥ねていないというようなことをいうので、たまにやらせてみると面白いと思います。

漢字学習支援における教師の役割

そんなことをいったら教師はなにもすることがないじゃないかといわれるかもしれませんが、そんなことはありません。学習の交通整理をしてあげるのは非常に重要です。いまいったような面白い、楽しいようなやり方で漢字に親しませることは、地域で勉強している人たちにもきっかけとしてよいことです。そして、本が読めるようになり

☆面白い素材の読み物

→ 漫画、テレビCM、広告、ジョーク集

☆習った漢字でポスターを作る、物語を書く

☆聞きながら、漢字を探す

☆漢字を使って、話す

図20 漢字学習と他の技能の学習とのコラボ

たい、新聞が読めるようになりたい、日本語でレポートを書かないといけないというような人たちには、ある程度、体系的な学習への道筋を示してあげる必要があります(図21)。医学などをやる人たちは、ものすごく難しい常用漢字ではないような漢字も医学用語にはたくさんできます。そういった場合も、構成要素の面から分析できる力や、漢字をヒントに語構成を分析できる力などがあれば、自分たちで乗り越えていきます。

それから、学習がうまくいっているかどうか、先生にフィードバックしてほしいという学習者は多くいます。やらせっぱなしではなく、どこがうまくいっていて、どこがうまくいっていないのかというフィードバックは必要です。いまインターネットでどんな情報がとれる社会ですし、辞書や参考書を使って自分たちでも勉強ができます。なんといいっても漢字は自律学習が中心になるとはいうものの、どうやったらいいかわからないという学習者も多いので、それらを紹介して、そのなかから自分に合った方法を選んでもらう。やっつうまうまくなかったら、適宜、他の方法もあることを示したり、アドバイスしたりすることが大事です(図22)。



図21 体系的な学習への道筋を示す



図22 学習方法を紹介し、適宜アドバイス

おわりに

漢字学習の道は果てしなく続きます。そんなに簡単には終わりません。平仮名や片仮名のように、五十音が全部終わりましたという日はきません。いつまでも続きます。ただ、その先に光が見えないトンネルにはいったような状態だと、心理的にストレスに圧迫されて、途中であきらめてしまう、なにか自分を正当化する理由を見つけて、こんなものはやらなくていいとかいうようにあきらめてしまう人が増えてしまうのが残念なことです。先に光が見えれば、難しい難しいといっているだけでなくて、面白さも見つけられるのではないかと思います。

外国人に日本語を教えていくなかで、漢字は、非漢字圏学習者にとっては非常に大きな圧迫する壁になりえるものです。そこをなんとか突破するために、難しさをなく、面白さ、楽しさを見つけてほしい。一人でコツコツ出口の見えないトンネルのなかで作業するのは辛いものなので、もうちょっと明るい光が見えるところまで、一人でなくみんなで活動しながら勉強していけるようになればいいというのが、非漢字圏学習者に対するアドバイスです。

反対に、漢字圏の人たちは、もう漢字はできる、わかるから特に勉強しなくて

も良いと思ってる人たちもけっこう多いですね。特にはじめのころです。上級くらいになると、漢字をまじめに勉強しなかったからか、読みが不正確なもの、発音が不正確なもの、中国語で使う品詞の使い方と日本語で使う品詞の使い方が違うので、いつまでたってもそれがなおらない。逆に、非漢字圏の学習者のほうが上級までできていて、中には、じつに鮮やかにことばを使い分けて、漢字も正しく使い分けているのを横目で見ながら、どうしてはじめてのころからちゃんと勉強しなかったんだろうと後悔する人も多いのです。それはある意味では先生にも責任があります。教室に漢字圏と非漢字圏の学習者がいたら、先生は非漢字圏の学習者ばかり面倒をみて、漢字圏の学習者に対しては、あなたはもう大丈夫だから自分でやりなさいというようにほうっておくようなことが多いですね。漢字圏の学習者は、もう大丈夫だと思いついて、自分の弱点や、やらなければならぬことに気がつかないことが多い。そうならないように警告することも大事です。

漢字学習の道はけっこう一本ではなくて、学習者の出身の文化圏、学習目的などによって、頂上に登るためには何本も道筋があります。なんのために、どこまでできればその人の学習目的が達せられるか。日本に旅行にきて、ちよつとサインが読めればいいという人に、二千文字も教える必要はありません。地域に住んでいて、周りに支援してくれる人たちがたくさんいるので、読み書きはできなくても、話を聞いてわかれば大丈夫だという人もいます。最初から漢字で苦しめることではないのかもしれませんが、でも、やっぱり読めるようになりたい、読めたら便利だなあ、読めたり書けたりできることで自分がステップアップできると気がついたとき、その道筋を示してあげられる教師が

必要であろうと思います。

さきほども申し上げたように、漢字圏の人たちには、はじめに、むしろ厳しいことをいって、日本の漢字と中国の漢字は違うということをしつかり認識させて勉強をはじめさせれば、中級、上級になったときどんどん上達していけます。いまのように停滞しなくてすむ日があるのではないかと思っています。

限られた時間でしたのでまだまだお話ししたいことがあるのですが、このあとに控えておられる五名の先生方から世界の漢字教育の話聞くことを楽しみに、私からのお話はここまでにさせていただきます。どうもありがとうございました。

- 1 注
国立国語研究所 (1976) 『現代新聞の漢字』(国立国語研究所報告56) 秀英出版
- 2 加納千恵子・大神千春・清水百合・郭俊海・石井奈保美・谷部弘子・石井恵理子著／関正昭・土岐哲・平高史也編 (2011) 『日本語教育叢書「つくる」漢字教材を作る』スリーエーネットワーク
- 3 武部良明 (1983) 『漢字はむずかしくない』アルク
- 4 山本康喬 (2012) 『漢字音符号典』東京堂出版
- 5 Pye, Michael (1971) 『The Study of Kanji』The Hokuseido Press
- 6 Rowley, Michael (1992) 『KANJI PICT-O-GRAPHIX』Berkeley, Ca: Stone Bridge Press
- 7 ガリーナーヴォロビヨワ・ヴィクトル・ヴォロビヨフ (2005) 『漢字物語 I』キルギス日本人材開発センター
- 8 ボイクマン・総子・渡辺陽子・倉持和菜・高橋英雄 (2007) 『ストーリーで覚える漢字300』くろしお出版
- 9 Heisig, James W. (1977) 『Remembering the Kanji』日本出版貿易
- 10 浜西正人 (1983) 『浜西式 角川漢字学習字典』角川書店